

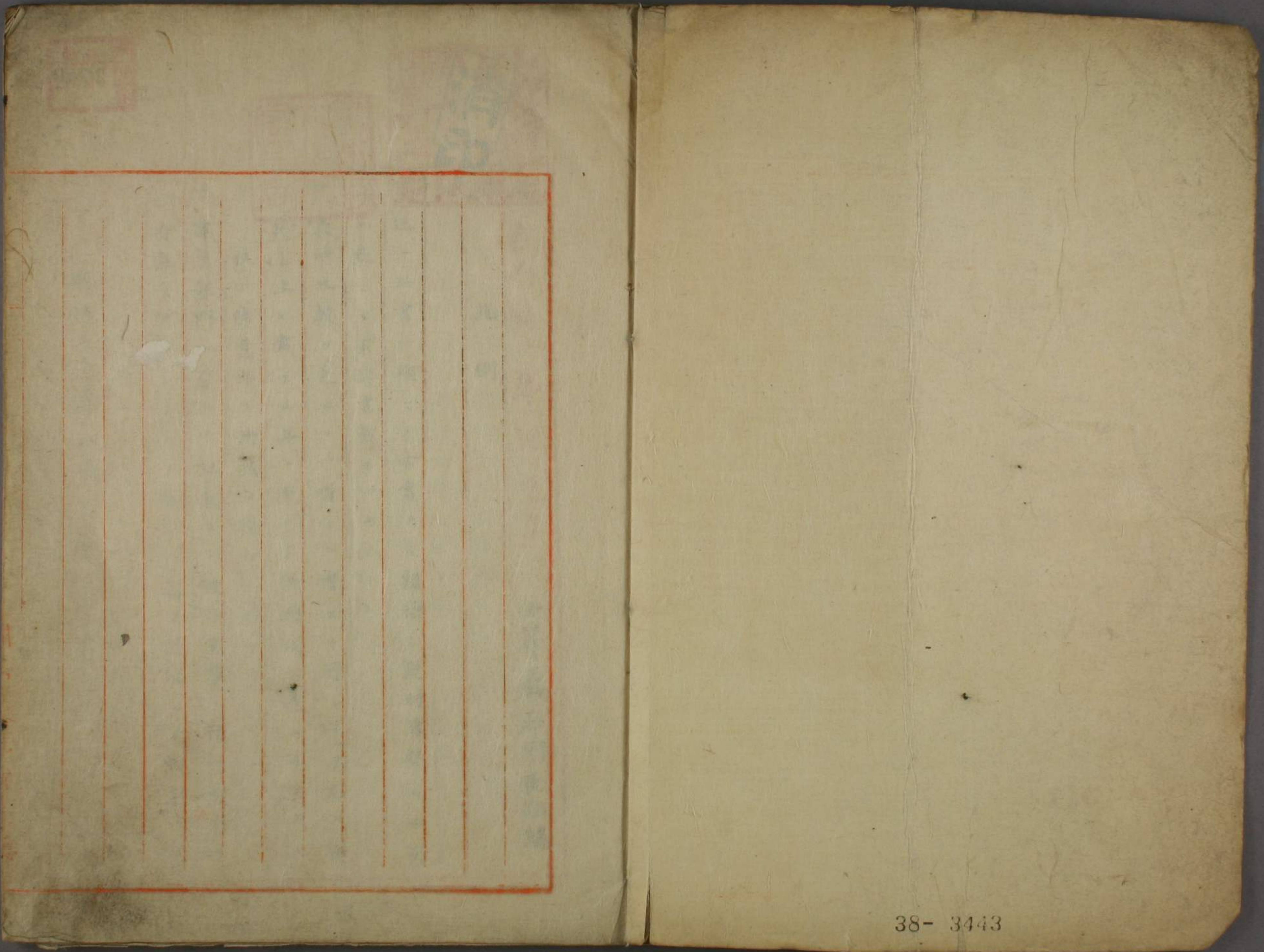
舊土人景况概略

甲第 西島

明治廿五年
 圖書字號

= 16
 2740





38- 3443



色人、喉、
凡例

十等属石田良助編

凡ソ此書ハ種々ノ古書ヨリ摺撮シ現時目撃スル所ニ照シテ取捨書載スルモノトス

表中比較ヲ見ルニハ首ノニ書スル所ノ年ヲ左ニ横行シ上ニ載スル年ニ照シテ其増減ヲ見ルモノトス

但シ隨意年ノ増減ヲ得ルノ法ナリ

一 渾テ部門ヲ分ツテ記載スト雖モ其事ニ依リテ自ラ分離ス可ラザルモノ有レハ之ヲ混記シテ甄別セス

明治十三年八月

人種及ヒ其起原ハ紛々ノ論雜駁ト説アリ一ニ歸着ス
ルモノナレハ採取ス可キナレ故ニ此ニ記載スル能
ハズ僅カニ男女ノ情態ト其衣食住ノ景状等ヲ抄録シ
以テ其一班ヲ辨セシムルニ在ルニ
男子
皆髮ヲ被ハリ鬚ヲ蓄ヒ顔面只鼻ノ凸突タルト眼ノ炯
々タルト是レノ長而シテ髮ハ其肩ヲ過レハ之ヲ断シ
鬚ハ断スルヲ忌テ其長ヲ賣シトス故ニ其鬚著シク
長キモノアルハ則テ衆土人之ヲ尊称ニテカハイト
云ノ(カハイ)神ノコトナリ推尊スルノ由ヨナリ(簑笠
被ハラズ雨露ニ暴ニ鞋履ヲ用エズニテ裸跣ス然レモ
若シ山谷ニ入ルカ或ハ砂磔ノ遠キヲ行クハ鹿皮鞋

Blank page with faint red seals and bleed-through text from the reverse side.

眞皮等ニテ製スル所ノ者ヲ履テ歩ス（女子又同ニ且ツ
蘇トニハ先蘇ヲ去リ之ヲ能ク乾固ニ能ク打テ耳ハ環ヲ
穿テ修飾トナシ身体最モ毛多ク眉毛一條ニ連リ其甚
ニキニ至リテハ惣身毛厚ニテ獸ヲ欺ムクカ如キモノ
アリ又妻妾教多要ムモノアリ然レモ相互ニ嫉妬ノ念
ナク親睦シテ生計ヲ勵ムト云フ

女子

凡ソ女子唇ヲ針ニテ刺シ墨ヲ答ルシヲ以テ慣習ト
ス其刺點ノ景狀ヲ説カシニ先年齡八九歳ニ及バハ上
唇ノ中央ニ豆大ノ黒點ヲ刺シ除々周囲ニ及ホスモノ
ニレテ其刺點全ク終ラザレ中ハ男女ノ交リヲ嚴禁ス
ト然レモ是亦一定スルニアラズ其地方ニヨリテハ臨
嫁ノ時ニ至リテ之ヲ施ス猶吾俗鉄督ヲ施スカ如ク其

ニ心ナキヲ表スルモノナリト云ハリ或ハ古書ヲ散
見スルニ顔面花及ノ狀ヲ點スルアリ今唇ヲ刺スヲ見
ル只口ノ周圍ノ黒キヲ見ル未タ顔面ニ雜花ヲ刺スヲ
見ズ知ラズ古共昔コノノ有リテ今ナキカ手背ニハ多ク
刺シ狀如キヲ點深ス是其嫁ニ掃クノ際ニ刺點スル地
方ニ父母或ハ叔父母ノ刺ス所ニレテ夫レニ關セザレ
地方ハ老練習熟ノ爺姪等ノ刺ス所ナリト云ハリ然レ
ニ官廳此慣習ヲ矯正セシムル致シ數年前ヨリ堅ク之
ヲ禁ス又耳環ハ男子ヨリ稍小形ナルヲ連環ニ之レニ
粧飾スルニ五色ノ絹綿布ヲ用ユ且鏡ヲ以テ第一ノ
寶器ナリトス其形テ方圓一ナラズ方ナルヲイヒタテ
ト云フ銅貨ニテ蠟ヲ塗リ銀ヲ以テ花草藻ノ容ヲ鏤
メ或ハ玻璃ヲ以テス其頸ニ繫懸スル所ノ緒ニ貫クニ

珠玉銅鐻等ヲ以テ飾トス其制巧妙ヲ尽スト謂フヤ
土人酋長ノ婦女吉凶ノ事アルハ此器ヲ頸ニ懸ケ鏡
面ヲ背前ニ垂レ而シテ禮ヲ為ス此器元來北韃靼ノ製
ナリトモ云ヒ又往古陸羽地方ヨリ傳來タルモ多ク
存スルトモ云フ之レヲ要スルニ惡摩邪鬼ヲ消滅スル
ノ器ナリトス

衣服

地方ニヨリ秋冬ノ候ニハ熊鹿犬狐ノ裘ヲ着ニ或ハ出
産ノ物吳ヲ以テ諸國ノ舊衣ニ易クテ服スルモノ有リ
ト雖ハ概テ厚綿ヲ以テ常服トス其厚綿ヲ紡織スルニ
ハ土人ノ婦女春初融雪ノ候王言ヲヒヨウ(和名マキ)赤
クモ(和名ニレ)西樹ノ皮ヲ剝取シ外部ノ黒皮ヲ去リ稍
内部ニアル膜皮ヲ精選シ之ヲ河水ニ浸ス大凡三十

日ニシテ其間屢々水ヨリ出シ擦壓スル數回極メテ柔
軟晒白ナランメ淡氣ノ除去セルヲ見テ之ヲ乾晒ニ指
爪ヲ以テ細割織糸トシ煉深ノ巧ヲ施サ不直ニ迂緩
チレ機ニ上セテ織成ス其披皮製ヲ土言ヲヒウアルス楡
皮製ヲニカパルス稱スレ土人ニ非ザルモノ草ニ之
ヲアツシト唱フ能ク雨露ニ堪ユルヲ妙ナリトス文ヤ
トルニ刺繡ヲ以テスルハ振津大和其他ノ諸州ヨリ到
ル必ノ紺木綿等ヲ細織ニ裁裂ニ領袖口或ハ裔ノ邊ハ
電細ノ如ク施シ其上ヲ糸ヲ以テ刺繡ス其精巧見ルベ
キモノアリ帯ヲムルリト云フ糸ニテ組タルナリ平打
ニ組織セルヲ云フ丸ク組織セルヲ亦厚綿ト云フ是皆
平生ノ服スル所ニシテ獸皮ノ製亦軟柔ニシテ着ヤス
キモノナリ然レニ古昔酋長ト稱スルモノハ身被錦ヲ

服ニ社ニハ黒天鷲賊ニ金糸ヲ以テ龍ヲ縫績セルモノ
ツ着セルモノアリシト今ニ至リテモ尚紅綿ノ陣羽織
(陣羽織一本邦古昔武具ノ一形ノモノヲ着スルモノアリ
テ軍旅ニ出陣スル中ノ服)
リ(錦ハ夷錦ト云フ韃靼滿州ノ産ナリ龍形ヲ)社皆尤ヲ
帝トス

食糧

食糧ハ深山ニ住スルモノト海岸ニ居ルモノトニ按リ
テ自ラ異ナルモノニシテ其深山ニ住スルモノハ熊鹿
及ヒ狐等ヲ獵獲シテ食トス其渾獲スルノ術種々アリ
或ハ鮮ヲ以テスルモノアリ又或ハ罌罌毒矢等ヲ以テ
スルモノアル等一々此ニ縷述スル能ハス(深山ニ住ス
ル概子河畔溪邊ニ住居ス)又其海岸ニ住スルモノハ魚肉ヲ以テ常
食トス其魚ヲ漁スルノ術モ亦頗ル多ク短簡ノ能ク尽

ス所ニ非ラズト雖モ概畧細又ハカクウカニ(銘也)ノ柄ノ
長キト四間許之レヲ以テ海魚ヲ衝刺ス海底深キ中ハ
亦柄ヲ加ヘテ用々冬季河海ノ氷氷凝シ充分ノ渾魚ヲ
為ス能ハサレ申ハ氷上ニ七八寸回リノ小孔ヲ穿ツテ
其傍ヲニ獸皮等ヲ敷キ坐シテ魚ノ游泳ヲ瞰視シ銘ヲ
以テ刺衝ス其妙實ニ驚ク可シ其氷結ノ渡ルニ堪ユル
ヤ否ヤシトスルニハ必スニモ大或ハ狐等ノ足跡ヲ見
ルノ後之ヲ踏ム然ラズンハ危險トナシテ此業ヲナサ
ズ又氷上瑣少ノ積雪アルニ踏ム不透明鏡ノ如キヲ以
テ好機トス時トシテ又六七尺以上ノ木杖ヲ帶佩シテ
渡ルトアリト蓋シ氷ヲ踏破リ身墮落セシトスル中ノ
豫防ナル可シ而シテ其得タル魚ヲ烹食スルニハ海水
ヲ以テ貯蓄ニハ乾固ニシテ干魚干肉トナシテ藏スルヲ

常トス既ニ右ニ説ク如ク冬季ト雖比亦澳莫ノ術アリ
然レ比是固些少ニ過キ不故ニ夏季草根ヲ掘リ草葉ヲ
摘ミ能乾晒シテ舂細ニ糟粕ハ堅固ニテ餅ノ如クナニ
粉ハ乾暴シテ葛ノ如ク製シテ貯蓄ス其食スル時ハ團
丸ニシ魚油ニ煮テ食ス魚油ハ小鯨及ニ鯨其他ノ魚獸
肝脂ノ良好ナルモノ又ハ地方
中ニヨリ海豹ノ脂油ヲ用ユル等渾テ油ハ食物ノ又或ハ
海水ヲ以テ煮テ喰フモノアリト雖比其全ク海岸ト隔
絶セル深山ニ幽居スルモノハ鹽ニ白湯ヲ以テ煮煮シ
項少ノ塩分モ含マザルモノヲ食スル者アリ其食スル
草五拾三種皆自然ニ山野溪澤ニ生スルモノニシテ其
名殊離駛舌ノ語ナルヲ以テ鮮ニ難クケレハ僅カニ譯
スル所ノモノヲ擧ケシニ防風薊欵冬花欵冬覆盆子桔
梗虎狄蔓菁等ニシテ何レモ開ケタル人ノ食スル所ノ

モノト同シ
以上述ブル所ノモノハ穀食セサル景況ヲ摘撮スルニ
ノナレハ今其穀食ノ事ヲ説キ以テ此項ヲ全クセシト
ス
土人穀食ヲアマタト云フ煮ルヲシユケト唱フ故ニ
アマタシユケトハ穀食ヲ煮ルト云フ事ナリ又炊クトモ
云フ煮ルト謂ルモノハ土人ノ境當時未夕飯ニ為ス
ヲ知ラズ唯水ヲ多ク入レ粥ニ煮ルノミナリ此ヲ以テ
斯クハ稱スルナリ又一種ノ草ノ葉根ヲタ子ヲラタ子
ハ考テ
培ルニ蔓菁ノナリトスカ土人大ク食スルニハ汁ニ煮テ喰
フ事ナリ其食セントスル時堀出シ来リテ根葉ヲモ十
切リテ魚肉ト混同ニ鍋ニ入レ海水ヲ以テ塩氣ノ適度
ヲ計リ煮熱ニテ食スルナリ是レヲラタ子ヲハワト稱ス

ヲハワトハ汁ノコトヲ云フモノニシテラタ子ヲ入レ
タル汁ト云フ義ナリ之ヲ開ケタル人ニ比シテ言ハシ
ニハ「アマタハ」猶ヲ飯ノコトク「ラタ子」ハ「猶菜汁」等ノ如
シ然レト土人ノ習ヒ敢テ定マリタルニ非ラズニツト
モ何レモ糧食トス而シテ此レ等糧食ニ抱ル業事ハ
専ラ女子ノ業ト為スコト亦開ケタル人ニ異ナルナシ
其食スル有様ヲ^叙述セシニ穀ヲ喰フ「ラ」アマタ「イ」
ト云フ多クハ一日兩度ナリ時ニヨリ客人来リ物語ノ
夜ニハ三四度又ハ其餘ニモ及ブ「ラ」アリ是蓋シ食事ノ
度數確定セサルモノニシテ開ケタル人ノ矩矱整正ナ
ルモノト固ヨリ比シテ論ニ難キモノトス而シテ其食
スルモノ先初メ汁ヲ食シ後粥ヲ食スルノ習俗ナリ又
開ケタル人ノ如ク汁ヲモ粥ヲモ一同ニ烹炊シ等シク

食スルニ非ラズ一個ノ鍋ニテ烹爨スルヲ以テ先ツ汁
ヲ烹テ食シ終テ後粥ヲ炊キ食ス又稀ニハ魚ノミヲ湯
煮ニナシテ食スル事モアリト且先汁ト粥トヲ以テ
日々ノ常食トナスナリ其汁ト粥トヲ^{粥ニ又魚油ヲ}食
スル既ニ前ニ述ブルカ如ク亦決シテ一方ニ偏ス可カ
ラズ汁ヲノミ啜リテ他ヲ喰ハサル非モアリ右三種ノ
物ヲ食スルニ幾梳ヲモ飽食スルト云フニ非ラズ一梳
ヲ以テ限レルモノ、如シ其三種ノ中或ハ二種アルモ
一種アルモ亦各一梳ヲ限リテ止リ是等ノ「ラ」如何ナル
因故ヨリ定ムルモノカ廢歎拘ヒカラザルモ敢テ意ト
セサルハ奇ナル習慣ト云フべシ而シテ一梳ヲ食スル
毎ニ口ニ詛文ヲ唱フ穀魚項少ノ差アリ是レ何レノ食
ト造物主ノ賜モノニテ人ノ身命ヲ保ツ所ノモノナレ

ハ穀菜膏肉亦各司レ神アリ之レヲ拜スルナリト其食
スル時刻ハ朝疾起テ直ニ食事ニ就クナリト十時モシ
リハ十二時頃ニ至ル其故ハ朝起ルヤ谷々一ノ業ヲ營
ミテ石食スレハナリ男女モ異ナルニ非ラズ譬ハ男
子漁獵ニ出レハ女子モ亦アツレテ織ルカ如キ類ナリ
若シ食事ノ時ニ當リ家族ノ中他ニ行テ其席ニ非ラサ
レハ先暫ク虚フレテ待帰リタル後食ス若又其歸ル
ノ晚ケレハ其應分ヲ梳ニ盛リテ後皆食事ヲ為ス又食
事ノ時外ヨリ人ノ来ル事アレハ其人數ノ多少ト物ノ
過不及ヲ論ヤズ徵少ノ食物ト雖モ之レヲ配分シ獨リ
食スト云フヲ忌ム若シ餘リニ纏カノモノニテ各配
分ス可カラズト察スルハ其坐ニアル老幼ノミニ與
ハテ其主其族食ハサルヲアリ或ハ老衰ノモノカ重病

ハモカ力住居ノ近傍ニ在リテ稼穡糊口意ニ任カセサ
ルモノアレハ必ス食事ノ度毎ニ齋持シテ食ハシムル
等美德至レリト謂フヤ且土人ニモ亦數人ヲ招待シ
テ饗應宴會スルアリ又或ハ遠方ヨリ旅人來ル事アレ
ハ幾日ト云フヲナリ留滞セシメ食事ノ中最も嗜好ス
可キモノヲ取リテ之ヲ饗スルヲ常トス此ヲ以テ之ヲ
考フルニ土人ノ性純樸ニシテ且親愛深厚交際和睦セ
ルヲハ外見ヲ以テ思ヒ計ル可カラス
土人ノ食ハ鳥獸魚ノ三類ヲ專ラニ用ユルト雖モ不毛
ノ地ニシテ米穀ノ類絶テ生スルヲナレト為サハルハ
固ヨリ論ヲ待タズ又米穀ノ類古ヨリ絶テ食フヲナシ
ト為ス可カラズ只專ラニセサルノミ今古書及ヒ現ニ
盛見スル所ヲ以テスレハ古ヨリ穀屬アリ則ケ稗ノ一

種ニシテ鳥禾ノ類是ナリ箇ハ之レ何レノ地ニテモ生
育シ又或ハ培作シ糧食ノ一助ト為スナリ但シ極北ノ
地ニアルト
人ノ如キ斯クノ如キモノ作リ或ハ取獲スルヲ聞カス
是等ニク上人ナリト云ヒ其間ハタレ遠クニテホタ
然レ如キ目今ハ其如何ヲ知ラズ之レヲ稔ニテアユラ
シアマ、ト云フアユトハ尖銳ナル細毛ヲ云フ乃チ刺ノ
コトナリヲシトハ在ルヲイヒアマ、ハ穀食ノ通稔ニ
シテ刺ノアル穀食ト云フ事ナリ此稔ハ尖毛多クア
ルヲ以テ斯クハ云ハルナリ而シテ是ヲ尊ブ事亦甚シ
トス其作藝ノ初ノヨリ食スルニイタル鄭重能ク注意
シ是ヨリ出ル糲粕ト云ヒ糲リニ擲棄スル事アラズ其
捨ル所ヲ塚ノ側ニ定メムルクタクカモイト稔ニテ神明
ノ在ス所ト為シ尊ミ恐ルハナリ此稔ヲ興州羽州西國
及ニ松前ノ地ニテハ稀ニ作ル者アリテ蝦夷稔ト稱ス

ルモノアリ其性質田稔ト異ナレナシ只人ノ手ニ係リ
テ其生熟ノ性ヲ遂グルト郊原叢棘ノ中ニ生育スルト
ニ據リテ形テ自ラ異変ヲ来ス所以ナリ然リ而シテ土
人ノ之ヲ食糧ニ供スルコト尋常鳥鳥ノ肉ニ比ス可キ
モノニハ非ラズ最モ貴重スルモノトス又土人ノ性最
モ酒ヲ嗜好ス若シ他ヨリ穀物ヲ得タルハ之ヲ濁酒
ノ一種ニ醸シ其熟スルハカムイ飲ト稱シ近隣ノ衆
庶ヲ招待群集シ酒樽ヲ傾ケ盡サズハ終日終夜ト云
ハ亦退散セズ渾テ酒ハ己レノ醸造スルト他ヨリ之ヲ
得ルトニ関セズ皆ナス如ク樽酒ノ竭尽スルヲ以
テ飲宴ノ限リトナス
往昔食物ヲ莫烹シ酒醬ヲ温熱セシメシト歎スルモ
鍋ナク釜ナシ土ヲ以テ鍋形ノモノヲ製シテ用ユ其

山野ニ泊スルニハ時トシテ秋冬ツ重子テ漏出セザ
ラニメキ以テ糞糞ス湯ヲ沸カサントスルニハ一ノ
器物ニ水ヲ入レ之レニ燒石ヲ投ニテ湯トナスカ如
キ奇異ノヲアリト今猶存スルモアルヤ否ヲ知ラス

住居

居室ハ唯四壁ノミノモアリ又樹木ヲ削ユセズシテ
直ニ柱トシ笹條ヲ梁ネ或ハ葎茅ヲ以テ蓋フ屋中別ニ
閨室ト庖厨トノ區別ナク土間ニ管苔(アフスケ)ヲ敷キ
圓炉裡ト鍋一個ヲ以テ煮炊ニ充ツ而シテ其爐ノ邊
リ甚ク穢汚物ヲ食スルモ其器ヲ洗フト云フナク鍋
中指ヲ以テ撫廻シ又掬ミ食シ又或ハ紙ト丹ヒ他ノ物
ヲ糞糞セシト欲スルモ直ニ其鍋ヲ用ヒ湯浴ナク朝夕
起出ルモ面手ヲ盥洗スルヲナク手巾ヲ持タザルヲ以

テ海コリ上ルモ亦其濡レタル俵ニテ炉火ヲ以テ乾ス
閨房ナク廁屋ナク草業ノ間岩溪ノ中ニ糞尿ニ然レド
其糞尿所々ニ散在シテ汚穢臭醜ヲ来スノ憂アルナレ
是大或ハ鳥ノ啄喰スル所トナルヲ以テナリ又夜ニ卧
寐スルニ襖袂ナク只アツニ走重ヲ以テ足レトスル
アリ又或ハ山谷ノ土上ニ卧シ雨露ニ打タルモノ有
リ
廩倉ノ如キモノアリ四柱ヲ建テ二階造リトシ其下ツ
ハ壁ナク柱毎ニ木板ヲ箠ニ以テ鞆ヲ防クノ具トナシ
之レヲ塵ヲニ茅茨葎蓋ヲ以テス多クハ食物及ヒ貴重
ノモノヲ入ルモノトス
右ニ述フル所ハ土人住居ノ大約ヲ舉ルノミ固一方ニ
偏視不可カラサルモノニシテ中ニハ日本風ノ家屋ヲ

構造ニ全ク土人ノ情態ニ異ナルカ如キモノアルナリ

稼 穡

男子已ニ十歳許ニナレハ朝暮船ヲ蕩ニ或ハ海水ニ游
泳沈没ニ莫^具ヲ捕リ又山野ニ行弓矢ヲ帶テ鳥獸ヲ逐
フ等渾テ漁獵ノ事ノミヲ專ラトシ生長ニ及テ能ク習
熟セニテ計リ且好テ大ヲ飼フ其食餌ハ概子已レカ
食ノ羸レルモノ及ヒ魚獸ノ骨ヲ與フ然ルニ其馴從使
役セラレテ内地諸州ニ有ル所ノ大ト魚ハ亦遠ク及ハ
サルモノニシテ或ハ獸獵ノ為ノ山岳ニ扈從ニ或ハ地
方ニヨリ雪車ヲ牽カシメ又或ハ船ヲ陸ニ引揚ケニト
欲スルニ使役トナス類務メテ利用ヲナサシメ己ヲ補
益セシムルカ如キ只ニ生活ノ道ニ汲々スルノミ實ニ
感賞ス可キニ女子モ亦然リ相互ニ力ヲ恃セ船ヨリ魚

ヲ屋ニ運ビ之ヲ晒乾ニ又ハ脂肪トナシ或ハ干魚トナ
ス類皆縫針ノ暇男子業ヲ助ル其功勞亦少ナシトヤス

療 病

土人病疾アルハハ「イコロ」イワリコト云ヘル草ノ根ヲ
白湯ニテ洗シコレヲ服シ或ハ鯨肉、膾、胸臍、熊膽等ヲ服
藥トス徃々其功アリシト今ヲ去ル數十年前政府ヨリ
醫師ヲ遣シ土人ノ病ヲ診察セシメ種々ノ藥ヲ與フト
云ハ其之レヲ服スルヲ好マズ却テ古來馴染セル
祈禱ノ法ヲ喜ブ等愚陋ノ風化ニ難ク又疫痘其^他傳染病
ヲ忌避スルヲ最モ甚シトス若シ之ヲ患フルモノアレ
バ父子兄弟ノ親キヲモ棄テ顧ミズ或ハ山中ニ隱匿シ
又或ハ他ノ部落ニ逃避スルカ如キ頑魯ノ慣習ナリシ
ガ今ヤ概子然ラズ既ニ去ル明治六年中種痘ノ法ヲ施

サント土人等平生最モ馴致信認スル所ノ者ヲ撰抜シ
テ先導諭解ノ媒トナシ以テ其法ヲ試ミルニ皆命ニ
背クモノ魚ノ種痘大ニ行レ其効驗ニ亦著ニナリ以テ
尔来從前ノ風習ヲ輝脱スルノ域ニ向キトス

工業

擇捉地方ノ土人ハ稍々北域ニ進歩スルノ景状アルヲ
以テ各自分業ニ就ク故ニ鍛冶ヲ藏ハスルモノ有レハ
大ニ工業ト為スモノアリ或ハ高業ニ發スル有ル等
飯令他ノ供給ヲ仰カサルモ亦聊カ支障スルノ憂ナリ
生計ヲ立ツルヲ得ルト云ハ其他ヲ概視スレハ陶鑄漆
器ノ匠ユナシト云フモ可ナリト然レモ亦一二ノ長
スルモノナキニ非ラズ先第一彫鑿トス小刀ノ鞘須
也、柄等皆彫鑿ニテ文ヲ成ニ文多クハ波文魚鱗ヲ作

リ亦能ク巴文ヲ鑿スルヲ好ム皆他人ニ計ラズレテ之
ヲ作ス其鏤刻スルヤ初メ範疇ヲ設ケズ刀ニ随テ文ヲ
成シ自ラ其宜ヲ得ルヲ以テ止ム漁獵者ニ巧ニナル
モノヲ見ズ梳子海ニ遠ク閑暇無事ノモノ多ク之レヲ
善ク及ハ別ニ鑄成スルニ非ス皆ナ他ヨリ仰テ用エ性
亦長ク刀ヲ磨ク至鈍ノ刀ト云ハ一ツモ土人ノ手ヲ經
レハ水以テ鍛ク斬ル可ク陸以テ熊ヲ斬ル可ク銳利美
ニ妙ナリ其銳利ナルカ故ニ船ヲ製造ヲ為スニモ用エ
ルモノ有リトス而シテ其船ヲ製造スルヤ巧ナルモノ
ニ非ラズシテ甚ク粗糲ナルモノナリ川渡船等ヲ製スル
ルニハ只丸モ木杓ヲ鑿穿シテ船ト為シ漁船ヲ製スル
ニハ大凡柳ノ大枝ヲ得テ之ヲ乾枯ニ除ク割鑿シテ船
腹又ハ左右ノ舷トナス之レヲ組成ニテ船トナスニハ

紐ヲ以テ結付ス紐ハ多クトシ皮トハ海島ニシテ
ノモヲ用エ時トシテハ柳ノ若枝若シクハ檜根根切稍
細キモノヲニツ割トシテ用エ其結紐ノ間塞塞ニハ若ノ
乾晒ヤルモノヲ挿入スルカ如キ類輕ニ着過セハ甚夕
荒険ヲ覺ユルト至ニ其久シキニ堪ユルヲ以テ之ヲ推
セハ則チ稍堅固ナルヲ知ルニ足ル可シ又航海セント
欲スルニ船具乃ケ槳木ノ類入用ノ外ニ豫備ヲ携帶ス
ルヲ不祥ナリトシ若シ船具ノ損スルアルハ到處ニ作
成ニテ又之ヲ補フヲ習慣トス

珍寶

危罪アルモノハ價ニ寶ヲ以テス寶ハ大抵内地ノ古兵具
トス甲冑刀劍及ヒ鐔其佗刀屬ノ類金銀裝飾觀美人目
ヲ奪フ者ヲ貴重ス其罪ヲ價フカ如キハ輕重ニ隨テ寶

亦増減アリ至重ノ罪ハ至價フ可サレモノナシ故ニ
尚身命ヨリ重スルカ如シ土人ノ酋長乃チ重立タル者
ハ久シク年數ヲ經ル所ノ古代ノ物ヲ保存シ人ノ覽觀
セシムルヲ悦喜シテ其乞ニ應ニ且慇懃ニ接待
スルモノ有リト至ニ又或ハ其遺失セシムルヲ懼レテ之
レヲ深山幽谷ノ中ニ埋没シ妻孥兄弟ト至ニ亦與リ知
ル所ニアラサルモノアリ

生育

孕婦多悦スレハ其身自ラ河海ニ就テ生兒ヲ洗滌シ醫
藥ヲ用ズ唯祈禱壓勝ノ法ヲ行フヲ以テ其言ヲ信ス
祭祀
曾テ神社建營スルナリ神ヲカハシテ祭ヲ行別ニ定
マリタル神靈ヲ尚拜セス只山野ニ火ヲ點シ草木ヲ燒

キ其火ニ向テ心事ヲ祈ルヲアリ又日月及ヒ源義經(古
武將)ヲ拜スルモノアリト其渾テノ祭祀アル毎ニ必ス
尺内外ノ木ヲ削リテ上ヲ鬚髭トナシ別テ(鬚髭)ノ
如キ神幣ヲ造リ之レヲ奉ルヲ以テ定例トナス言「イナヲ
ト稱ス

禮讓

久シク離別スルノ親戚ニ相逢フ時ハ其礼ヲ叙ブルニ
兩額相當互ニ其兩耳ヲ捉テ涙泣良久フニテ退キ再拜
シテ右先弟一ニ別後ノ事歴ヲ舉ケ叙テ他ニ及ホス其
事歴ヲ言フ終ラザルニ何等ノ用事ヲ談スルト至ヒ決
シテ是レニ應スルナシ而カシテ其礼仪ハ老人ニハ最
モ鄭重ナリトス途中老爺偻ニ逢フテ路ヲ讓ルノ如キ
ハ其正肅ノ情態筆能ク記シ得可キ所ニアラス

智

曆日ナシ故ニ父母ノ諱日ヲ知ラズ己カ生年月日ヲ知
ラズ文字ナシ故ニ歴世古今ヲ知ラズ唯少時老年ヲ舉
テ之ヲ言フ蓋シ其記憶スル所ニ三十年ヲ過ル能ハス

樂器

土人音曲ニ用ユル三絃器アリ其狀琵琶ニ稍髣髴シテ
大小一様ナラズ之ヲ制作スルニハ木ヲ琵琶狀ニ削成
シ隋圓ノ処口ヲ刻鑿シ其上ニ薄板ヲ粘付シ之レニカラ
ムシノ皮ニテ製セル(カラヤ)ノ(麻)糸三筋ヲ施シ指爪
ヲ以テ彈スルニ(鋼)ヲトシテ音ヲ發ス又口ニ含テ鳴ス
モノアリ(鑿)ニ(圖)ノ如ク制シ口ニ啣シ指爪ヲ中真ノ針
ニ掛ケテ鳴ス是レ亦(鐘)々妙音ヲ出ス(其)ノ(狀)ノ(入)ノ
前ニ書載スルノ外(表)禮態祭舞踏婚相其他種々ノ慣行

有リト云氏説多岐ニ陟ルヲ以テ一ニ縷述スル能ハザ
ルノミナラズ既ニ書載ニ来ルモノト云氏渾テ土人ト
称スルモノ皆委ク然ルニ非テ如何トナレハ其土人
ノ中稍開ケルモノ有リ亦未ク開ケサルモノアリ或ハ
貧ナルアレハ富ナルアリ固一様ニ論究ス可ラサルモノ
ニシテ其開未開ト貧富トニ攷リテ平生ノ動作ヨリ衣
食住ニ至ルマテ又自ラ懸隔アルナリ今其概略ヲ説カ
ンニ先北海道ノ中其東洋ニ面スル之ヲ東地トシ西地
ト濱スル之ヲ西地トス而シテ其西地ハ東地ヨリ開
クルヲ稍先ズルノミナラズ草根木皮不足ナルヲ以テ
多ク穀類ト魚類ノミヲ食スレハ糧食モ稍上等ニシテ
東地ハ之レニ反シ多ク草根草葉ヲ交テ食ス故ニ稍下
等ナリトス且函館支廳管内ニアル土人ヲ見ルニ或ハ

飯富ニシテ家屋美麗髪ヲ梳リ鬚ヲ剃シ湯浴怠タリナ
ク身ニ綿布ヲ縈ヘ頭ニ笠傘ヲ蓋ヘ一日之ヲ既列スル
能ハザルモノアリ又稀ニ女子ノ三絃ヲ彈シ舞蹈ヲ能
スルモノアルカ如キ教化ノ至レルモノアルヲ見ル其
聞ク所ニヨレハ札幌本廳管轄及ヒ根室支廳管轄ニモ
往々斯クノ如キモノアリト是レ一方ニ偏シテ論ス可
ラザル所以ナリ
既ニ男女ノ情態及ヒ衣食住其他各種ノモノヲ略述シ
タルヲ以テ今又土人ノ統計表ニ就テ其増減ノ如何ヲ
説明セントス而シテ其土人ナルモノハ古昔之ヲ區別
スト雖モ明治五年戸籍ヲ精密ニ為スニ方リ政度教育
ノ異ナルモノヲ以テ一般ノ民俗ト同レク皆齒列シテ
戸籍簿ヲ作り其後依然衰遷セザリレガ近年又統計法

口	比				較	
	明治四年		全五年		全十年	
	減	増	減	増	減	増
計	七、九四五	七、五六九	七、六九四	六、五三九	六、六六四	八、貳七七
男	七、五六九	六、六〇三	六、五三九	六、六六四	六、六六四	七、九四五
女	七、六九四	七、五六九	七、六九四	七、五六九	七、六九四	七、六九四
計	八、九九	三、〇貳〇	八、九九	三、〇貳〇	八、九九	八、九九
男	八、九九	三、〇貳〇	八、九九	三、〇貳〇	八、九九	八、九九
女	八、九九	三、〇貳〇	八、九九	三、〇貳〇	八、九九	八、九九

以上掲ケル所ノ増減ヲ見ルニ其戸數ハ明治十一年ヲ以テ各年ニ比較スルニ其十一年ノ明治四年ヨリ減スル所七百五拾戸ニシテ百四拾八戸トス人口ヲ比較ス

科目	明治十年		明治十一年	
	戸	口	戸	口
	男	三三六	六四六	三三三
女	三三〇	三三三	三三三	三三三

ルニ明治十一年ノ明治四年ヨリ減スルモノ貳千八百三拾六人全五年ヨリ減スルモノ千九百三拾七人ニシテ獨リ十年ヨリ増スルモノ百八拾四人ハ此ヲ以テ之ヲ推ス年々減却スルモノ少ナシトセズ又開拓使函館支廳ノ管轄乃チ渡島國一圓後志國八郡膽振國一郡ヲ統計スル所也ノ如シ

函館支廳管内土人統計表

明治十一年三月三十一日

慶應二年				明治十年				明治十一年			
較比十年前		較比十年前		較比十年前		較比十年前		較比十年前		較比十年前	
女	男	口	戸	女	男	口	戸	女	男	口	戸
増	減	増	減	増	減	増	減	増	減	増	減

較比十年前 治明
 女 男 口 戸
 増 減 増 減 増 減 増 減 増 減 増 減 増 減 増 減 増 減 増 減 増 減 増 減 増 減 増 減

前表より見れば、戸数ハ減スルモ、総人負ニ動差ヲ見
 ず、是僅ニ一歳間ノモノナレバ、固ヨリ甚ニキ差當、有
 可キ理ナシ故ニ、数年前ヲ引証シテ、其増減ノ如何ヲ
 觀察セント欲スト、雖亦統計ノ正確ナルモノナシ幸
 ニ、是ニ據ル表、函館支廳管轄後志國、中久遠太櫓瀬
 棚ノ三郡ヲ調製スルモノアルヲ以テ、現時ノ統計表ト
 臚列シ、終カニ其一班ニ就テ、全處ヲ推究セシメント欲
 ス

〇三三〇〇〇五〇

右ニ掲ル表ハ三郡ナリト雖ハ僅々ノ部落ノミ而シテ
其慶應二年ト明治十一年ト比較スルニ其十一年ノ減
スルモノ戸數拾七戸人負七拾七人男四拾八人女貳拾
九人トス此他開拓使根室支廳ノ管轄根室五郡釧路七
郡千島八郡北見四郡アリ土人最モ衆居スル所ノ地夕
リト雖ハ其表紀スルモノ無キヲ以テ此ニ掲出ス
ル能ハス然リト雖ハ其聞ク所ニ拠レハ是亦年々減少
スルモノ益々多キヲ加フト今前ニ表紀スルモノニ比
シテ億測スルモ亦其減少スルハ固ク信シテ疑ヲ容レ
ザル所ナリ然リ而シテ其年々減却スルハ抑モ亦何ノ
因縁スルヤ仮令土人ハ居常ニ定ラズ朝夕ニ屋廬ヲ
結テ夕ニ之ヲ毀壞スル等衆散去來常ナキモノナリト
雖ハ其一方ニ散スレハ他ノ一方ニ衆スルハ理ノ最モ

見易キ所ナルニ斯クノ如ク夫レ各國各郡妻リ皆減消
シ顯スノ勢ニ至ルモノハ是必竟古昔土人ノミニシテ
諸國ノ人多ク之レニ邑居セサル前ハ海魚皆吾有山獸
皆吾食ト自ラ安シ各其衣食ニ足ルヲ以テ生活スルヲ
得タリト雖ハ近年諸國ヨリ移住スル民益大キヲ加ヘ
且海産ニ陸産ニ皆各精巧ノ機械ヲ用ヒテ收穫スルヲ
以テ土人ノ如キ知能感覺ニ匱ニキモノハ自ラ生活ノ
路ニ迷ヒ衣食住其處ヲ失シ以テ此ノ極ニ至ルモノ蓋
シ之アル謂レナラニ歎然レハ是亦想像ニ過キサルノ
ミ
但シ尤ニ慶應二年十一月ノ調マニテ數郡ヲ表紀セ
ルモノアリ參考ノ為メ付載ス

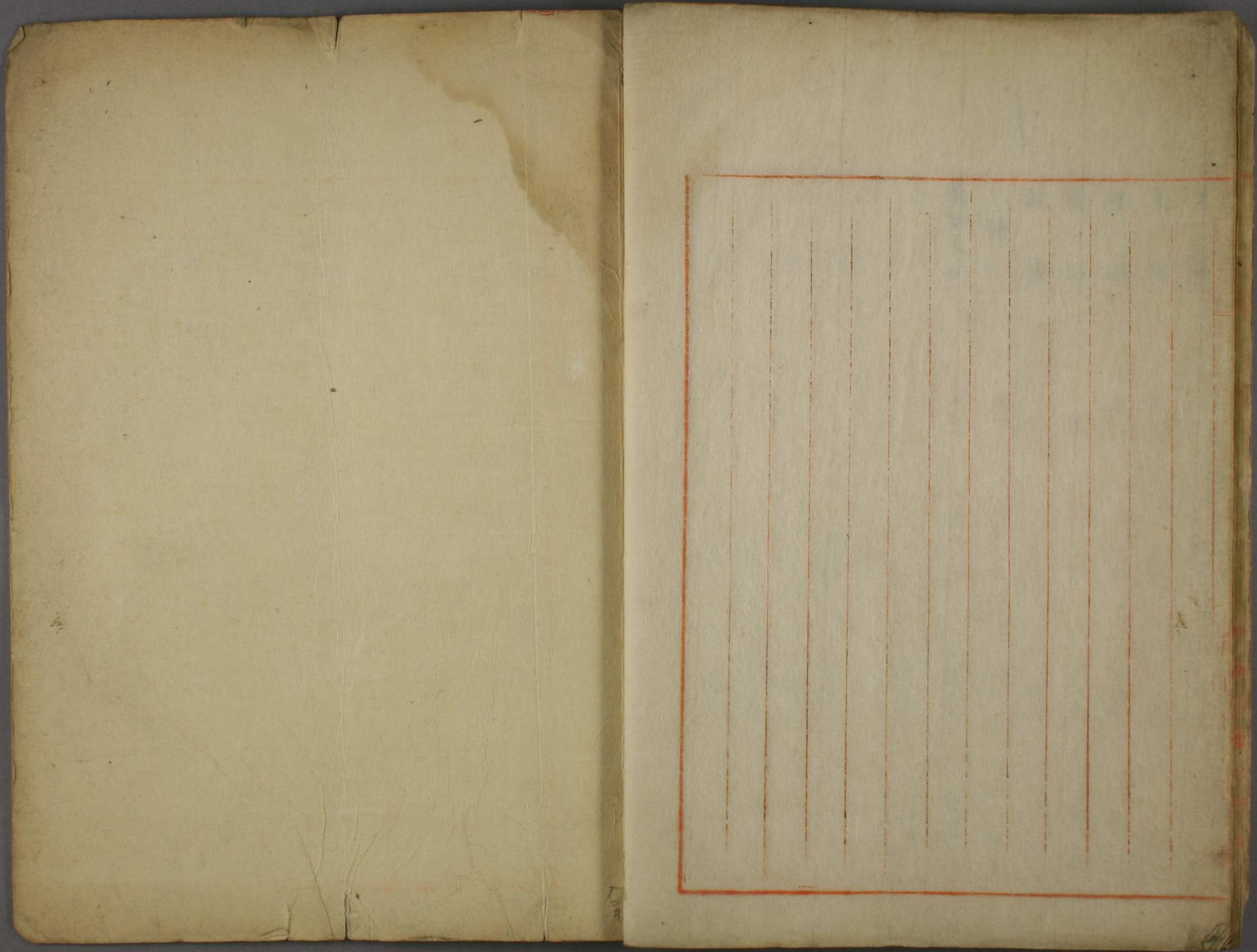
慶應五年月調戸

釧路	幌泉	様似	浦川	三石	静内	新冠	沙流	勇佛	室蘭郡	有珠郡	虻田郡	慶應五年月調戸
貳七貳	三〇	三八	志三	六志	志五六	志志〇	貳六八	貳貳九	志志	九五	九九	數人
志三志七	志〇九	貳〇志	六四三	貳三七	九九八	四五貳	志或九六	志志或貳	五九	五〇四	四三志	負
六四四	五五	九七	三三志	志或四	四七七	貳貳七	六三八	五七八	貳四	貳六八	貳四志	男
六七三	五四	志〇四	三志或	志志三	五或志	貳貳五	六五八	五四四	三五	貳三六	志九	女

岩内	古宇	積丹	美園	古平	余市	忍路	高島	石狩	厚田	網走	廿二ヶ	合計
志五	志四	志七	四	三八	八志	三〇	志三	志志五	九	又	貳	志八三九
四志	四三	六〇	志五	志或志	三七七	志〇四	四五	四三九	或四	或六六	八五	八、九、八、九
或八	或〇	三六	志〇	六〇	志九五	五志	或三	或或七	志三	志三或	四六	四、五、四、五
志三	或三	或四	五	六志	志八或	五三	或或	或志或	志志	志三四	三九	四、四、四、四

Blank page with vertical red lines for writing.

舊 樺 大 州	計	歌 棄	磯 谷	瀨 棚	太 槽	久 遠
三 三 八	四 七	三	真	吉 八	吉 八	七
真 四 七 四	吉 七 五	吉 八	七	七 七	六 四	真 〇
吉 真 四 七	吉 〇 〇	吉 真	四	四 五	三 六	吉 吉
吉 真 真 七	七 五	六	三	三 真	真 八	九



1959
1789

1780